

228台湾神太上真経

起源

歴世数百年い降、台湾では数多い人の民族英雄が現れ、台湾の国づくりや守護のために征服者によって土匪、暴民、叛乱の汚名を着せ受け弾圧迫害され神様に導かれて成就し、無形の力で廻転して、今では台湾の子々孫々を守護し自由法治に民主の方向に歩む、望んで台湾を世界に誇る民主の国に成立せる。

征服者は台湾にて「忠烈祠」日本の国内には靖国神社があり、台湾人は根強く台湾精神をたがやすために謹厳に台湾忠烈英霊を奉て感謝の心をささげ台湾のために血を流し命までも犠牲した大きな愛に敬いあがめなさい、台湾のもろもろ子々孫々は、彼らを各家庭に奉り、台湾の御霊にかすかの中加護を求めゆだね、国と民に永遠に香薫ように変わりなく続けて栄あれ。

台湾人は台湾神に祈り拝み、力の限りをつくして信仰に徳を加え、台湾人にへりくらす者に恵を賜う敬虔の心持で先民たちの忠誠な台湾の守護と国づくりの精神この天命を伝承し、生きている時は自分の務を全し、死までも台湾の民主と国づくりに奮闘し、しかと、わたしたちの子孫に限なく続きそして種族の災難と絶滅を免く。

大地講堂伝示於

2004年2月28日

たいぎ しょぶん あか
大義にて書文を明す

この書文は天運に^{しょうぶん てんうん おう}応じて時世の^{じせい てんかい}転回にて世間に^{せけん い つた}言い伝えられ、それに^{ほう}蓬萊台湾に^{らいたいわん}いましめを^{しめ}示し、天理は^{てんり}あきらかに^{ぜん あく みわけ}善と悪を見分し、なみのわたしたち台湾の^{たいわん たみ}もろ民は、この書文によって、^{しょぶん}みずに^{いまし}戒めみずにひかへるそして台湾人の^{たいわんじん みらい とも}未来を^{たいわんじん かなら}共にはじめ、台湾人は^{たいわん おしえ ある}必ずに台湾の^{たい}道を^{わん}歩く、それゆえに台湾を^{わん}認め、^{みと}願って台湾と^{ねが}生死を^{たいわん せいし とも}共にする人は、^{ひと かなら}必ず台湾神の^{たいわんかみ か}加護を^{ご え}得り、天命を^{めい}なが^{つづ}続きに^う受け、その後^ごは^{さいわい えいこう}福と^{えいこう}栄光あり。

にはちたいわんえいれいでん じにて
228 台湾英霊伝示於

ねん がつ にち
2004年2月28日

だいいっしょう むく
第一章 報い

禍と^{わざわい}福は^{さいわい}無差別に、人々は^{む さべつ}みずから^{ひとびと}招き^{まね}善と^{ぜん}悪の^{あく}報いは、^{むく}影のごとく^{かげ}付き^{つづ}そい、二二八の^{ににはち}犠牲が^{ぎせい}あがなく、それで今日の台湾に^{こんにち}前業の^{たいわん ぜんぎょう}報いが^{むく}続^{つづ}き、天地の^{てんち}過ちを^{あやま}司^{つかさど}る^{かみさま}神様が^{おか}すべての^{つみ}犯した^{あやま}罪や^{はか}過ちをおぼむねに^{はか}計らい^{ひんくあるい}貧苦^{かんなん}或は^{けいばつ}患難の^{わざわい}刑罰と^{けんりょく}禍は^{もの}権力の^とある^{もの}者から^{めん}富んでいる^{めん}者も^{めん}免じること^{めん}なく、^{はじめ}始から^{おわ}終りに、^{あつか}かれる^つまで、^{なく}扱^{なく}い^{なく}尽くし^{なく}亡^{なく}なりました^{なく}なる^{なく}までに、わたしたち台湾の^{たいわん}御霊は、^{みたま}天の^{あま}旨によって^{むね}時世に^{じせい}現れ^{あらわ}受けた^う務めを^{つと}よく^は果たす^はように。

だいにしょう かんさつ
第二章 鑑察

つかさ くらい かんさつ たいわんかみさま むじょうぼさつ くらい つ ひと よ したが
司の位の鑑察、台湾神様は、無上菩薩の位に就くし、人の世に従っ
ずじょう たいわん むほん もの つみ きろく さんし かみさま
て、すべて頭上において、台湾を叛する者、その罪を記録し、また三尸の神様
ひと み つき ついたち じゅうごにち みむね くだ じせい
は、人の身にて月の朔日と十五日こなしはたすように御旨を下され。時世の
わざわ すすく つかさかみさま たいわん はん ことば むほん つみ にちや
災におびやかされて救う司神様は、台湾に反する言葉や謀叛の罪を、日夜の
つかさかみさま こと しら あくぎょう あくじょう のが あらわ
司神様に事ごと報せ、その悪行と悪状は遁れずに現れる。

だいさんしょう くに
第三章 国づくり

すうひやくねん こう たいわんじん はくがい みずか どれい か なれ
数百年い降、台湾人は迫害をうけ、自らひくみになれ、奴隷化に馴さ
どうとくゆうき うしな みるしゅじんけん きょうよう とぼ おしえ すす
れて道徳勇気を失い民主人權の教養は乏しく、道があれば進みなけでば
うしろ しりぞ しんたい しょう でだて みたま ころろ いた くに うれ せいぜん
後に退き、進退には仕様と法がなく、御霊は心を痛め、国を憂い、生前は
ゆうし な あと えいれい おどす めぐ みたま
勇士、亡き後は英霊となり、この劫の巡りにまわりあわせ、もろもろの御霊
げかい しそん いまし じき きんぱく こっか いえ こっか
は下界にて、子孫に誡め、時機は緊迫にて国家は家、それゆえに国家がなけ
いえ たいわん みと ほうらい てき ぜん あく ぶんべつ よこしま
では家もなくなる、台湾を認め蓬萊に適して善と悪を分別して、邪にかた
たいべつ くに ちから つみた みるしゅ じんけん ひがん
よらずに台湾の国づくりの力を積立て民主をめぐむ人權は悲願であまねく
だい あい てんち せいぎ まず
をまことな、大なる愛、すなはち天地の正義は なたらとおなじにいる貧し
もの かた たいわん えいご どうとくゆうき かたぎ
い者を片よってかばい台湾を衛護し、たしかに道徳勇気を堅気にながびかし、
たいわん ごぞく たみ きょうえき たがい きず みるしゅじんけん
台湾では五族の民が共益に互に傷つけずに、そしてやはり民主人權をあが
むしゅ とち くに たみ ほろ うつく
める、無主の土地と国なき民は、ひきづづいて滅び美しい、いろどりがすぐ
はい き はめつ れんごく かたち かげ しゅんかん ち
さまに灰に帰しめ 破滅し、そして煉獄の形が影にみえ、瞬間に血のなま
のが かく
ぐさしがにおい、いかに遁よう、いかに隠れよう。

だいよんしょう ぼくじゃ
第四章 牧者

たいわん えいご ひと てんにんとも みな うやま きっじょう つ じゃあく
台湾は衛護する人は、天人共に皆に敬され、吉祥に付きそわれ、邪悪は
とお ばな みたま かご おこな みんしゅ ただ みち みちび てんちし
遠く離れ、御霊に加護され、その行いは民主の正しい道に導かれて、天地自
ぜん どうり したが たいわんだいぼさつ じょうじゅ しゅぎょう まこと おこな
然の道理に従い、台湾大菩薩の成就にむくい、この修行を真に行い、こ
がんりき じっせん ぼくじゃ
れは願力を実践する牧者である。

だいごしょう ぎょう むく
第五章 業の報い

ひぎ うご てんり りょうしん おこな そむ ちゅうぎ ぜんりょう
おろそかに非議に動かれて、天理と良心の行いに背き、忠義で善良な
ひと ほかがい たにん めいよだ り ひ ま
人を迫害し、他人の名誉等をきずつけて、そそのかすそして理を非に曲げる
こと を て が ら に し、真相をいつはりかたる、邪のはたらきを行い、民の心
しんそう よこしま おこな たみ ころ
に背叛し知識のない者を欺きだますかぎりのない口の業、心の業、身の業を
むほん ちしき もの あざむ くち ごう ころ ごう み ごう
こしらへる、そのよこしま おこな あく かなら いんが
報い、ある人ははじめから民主に心がひがむまちがへた人権を導き、良心
むく ひと みんしゅ ころ じんけん みちび りょうしん
にそむきもどる、あるいは部下をしいたげて、そのてがらを取り、わたしら
ぶか と
の言葉にむほんを犯してかならず天の罰を受る。

しそん めぐみ うけ かんしゃ
なみのわれだ子孫は恵を受けて、感謝をおもわぬで、うらみをやまずに、
みぶん けいべつ こくせい みだ つみ むじつ ぜんりょう ひと
ひくい身分を軽蔑し、国政をかき乱し、罪を無実にもでおよび、善良な人を
ほかがい ころ ざいぶつ と いっぽう む くらい と ただ もの よくあつ
迫害し、殺して財物取り一方に向き その位を取りのけ、正しい者を抑圧し、
さいち もの よわ もの あざむ ほう むし
才智がある者をしりぞける、みなしごと弱い者を欺きくるしめる、法を無視
わいろ う ただ こと ま ま こと ただ い かる こと
して賄賂を受け、直しい事を曲げ、曲げた事を直しいと言いふらし、軽んじ事
おも いのち た み あやま し
を重くせおわせ、命が絶つのをみるといかり、過ちを知りながら、あらた

めずにて、善ぜんをし知りながら行おこなわず、そして自みずの罪つみを他ほかに導みちびき、すべてをさへぎり、正ただしい者ものをあざけりわらふ、悟さとりの言ことばをおかす。

御上みかみの神様かみさまは語かたり、神かみの心こころに従したがい犯おかした者ものは、その報むくいは速はやくおこり、短みじかい人生じんせいには、必かならずたましいの業ごう、はやりやまひの業ごう、財物ざいぶつを尽つきなくなる業ごう、それ故ゆえに絶ぜったい対かるがるに軽ため々つつししく試つつしすな、慎つつしみ慎つつしみ。

第六章 速めに報い

時世じせい御上みかみの神様かみさまはいはれ：

人ひとがうしなうのをねがふ、人ひとの成功せいこうをそしる、自みずのやすらかなには人ひとのあやぶみ、人ひとがつぶれるには自みずのとく、悪あくをよしみにうつりかへ公こうをすたれて私しになり、人ひとの才能さいのうをひそかにとる、人ひとの善ぜんをいつはりかたる、みめがわるいのをかたどっていひあらわす、人ひとの名誉めいよ等にひそかにきずつけ、人ひとの財物ざいぶつを使つかい尽つくし、他人たにんの近親きんしんの仲なかをさき、他人たにんの愛あいをうばう、あらず人ひとに力ちからを添そへ、いきほいにのぞみのまま、かつことをめあてに人ひとをはずかしめわざはいの心こころをかくして、人ひとのすぐれた点てんをくじけさせる、自みずのおとっている所ところをかばい、そのいきほいにせまっておどす、きままにあらくきづつけ、これは知識人ちしきじんとして大中国帝国だいちゅうごくていこくのあわせすべるかんがへとつながり、遅たくましい者は弱ものい者よわをくするしめるおほぜいの心こころがまよふ怪あやしい事ことをいふ行おこない、よしあしの見分みわけがない、すじみちをのべる、自みずからあまんじて、邪よこしまな者もののなかまになり、必かならず落おち触ふれて恐おそれる、血ちに染そまる土とち地よになる、この世よの報むくいは万よろずの世せ代だいまでも返かえれぬ、急いそぎはやくいひつけに。

だいしちしょう かん よこしま
第七章 奸と邪

財があり地位が高い、世に時めきさかえ、それを見て、その人は追い出し、
ながされて卑しい人になる事を願う、衣服と生活が富、人を見て、そのひと
が破産して、家が減ぶ事を願う、美しい人を見れば、密かに心が生ずる、
貨物と財産を引き受け、そして人が減ぶを願う、望みが遂げなければ、恨み
と不平の心を持ち、過ちがあれば、それをかたる、体のかたわを笑い、才
智と能力のある者をほめばおさえる、これで御上の神様のことばでは人の
心のさまたげとくづれるを反応する、皆 殖民教育の容易ならぬ誤りであ
る、みづから教育者でありながら、この大切なときをりにおこないをなまけ
おこたる、それで急ぎ速くこのおとろへくづれる、誤りを引き戻すには、天
の助けをかして、そして天の助け添える。

また目にとめてみると蓬萊の仙島は、大におちぶれ、昔をなくし、御上
の神様も私も同じやうに感じると示すし語る、にしたつよくむりやりにうば
いとり、操を守り義を立てることを知らず、公職や代義士の身であり、欲し
く思うのをおかしうばい、そしてかすめうばい、わざはひがやまづ、特別の権
利にて、ひとかたまりに財物をあつめ、たくみにいつはりもとめてうつす、賞
と罰は不公平でいろいろごまかし、善悪をわきまへる本来の心がなく、節日
にはあそびたのしむ、手下には苦しめしひたげること、おどかしおどすその
いきほいをなす、幸せをなす、口軽になさけと義理をはなし人の守り行ふ
べき道をはなす、実際の事柄では品の悪い事を行い常に天を恨みながら他人
に投げてつける大声でいたく罵る、そしてかんがへなく自身の行ひなどを
かへりみることもなく同じなかまと合わせてはりあふてふるまい、新しいの
を得れば古いのをすてる、心ざまが劣る、うはやくをあざむき、財物には欲

の深く、悪口をつくり、いつはりの言葉で、他人の名誉をそしり、ないことを有るやうに作る、それで人の名をきずつけ、自分では正しいと思わせ、いつはり神霊をみだりに罵る、天地自然の道理をみはなし、心がまようふてあくまになし、疎かに親に背をむき、自のみなもとを忘れ、それゆえに御上の神様はあきらかに教へをしめし、天と地をあかしとし、そのひげたを、手本にあわして見る、皆限りのない罪をこしらへ、さかさにうつりかはることなかれ。

それゆえにみて台湾を背くと売る人はその行いはおほひかへす、心だては正しいくない、ひごろのくらしあるいは歌い舞ひして、つごもりのように、すなはちに終りはおそれてさしとめることを知らず、私らの御霊はかんがへ合せて計算、そしてつかさどる神はその軽いと重いにしたがふ、ごとしなどの罪は、きろくを計算してふんだくる、そしてかぞへ尽しのつどるときは命が終り、輪廻転生にもせおい報ひ、再びの世にも報う、三世にも期限がない、さらにわざはいは子孫も引き受ける、災いは細かでくはしい。

第八章 真と誠

しかのみならずにかたはらから奪い取る財物は正しくなくかたよりで、その家族まであてはかり、段々とほろぶ失ふ、もし命があれば、すなはち水と火やねすびに、そこなふすてる、やまひともものい、諸々の事、思慮のない取りあたひにあたる、かさねてまちがへて人の命を失した者は、これでたやすくかたなの持つ兵におたがいに殺し、あらず義にたがふに取った財物は、毒の肉で飢をゆるめ、毒の酒でのどのかわくをやわらげることし、これもあらずに満腹できず死におよぶ。

み かみ かみさま しめ
これで御上の神様はいわく示す。

われらは褒める、ゆえに政界を知り 多くて盛んなさまで、ひそかにか
んべつの権力をもてあそぶ、あらずにかたよりさらめ、自らにいたすらに
すぐれていると、人の司法の官吏は或はひと時の過ちを許す、でも形のな
い天からのとがめで罰を加える事は、しかりであきらかであって示す、子孫に
いましめひかへる、よこしまなすじを行うには、自らに悪い事を悔みあら
ため、おほぜいによい事を行う、そしてまことの心とまことの意義にえん
ぎがよくしたがふ 禍はおだやかにうつりかはる。

だいきゅうしょう むす
第九章 結び

えんぎがよい人は天の相があり、そのはたらきは国を守り、たみを愛す
る、そして台湾を母国としたためる者は、おのづと神様の力と加護に祈る、
蓬萊の仙気がとりすべて得り、公明正大なあまづちは万の霊が共にみわけ、
その身にめぐり来る運命にねがひおこないうなづく、台湾を守り行ふべき
道にのこるとほろぶの勇氣をかたくたもつ者は、大菩薩のむくひが得りなる
つく、天つちと宇宙をこしらへた神様をほめたた得る、あら神を泣かせ、お
んやうの柄をねしにぎり、宇宙をふるふ、天地の間にうやまふひらき、新
しいめぐりにあわせはじまりに適する、まさしくはじまりに適するには、お
びやかしをうつし千万の子々孫々を直ちにときすくうのは、おほいなさとする
者である。

なみの人がおさめる 行いは、多い人のあいだにかたよる事を好む、出家
した人の身のために、よもの相を除んには、むづかしく身のなかがは はく

ずれしぼむ、それで^{ほとけ} 仏を^{ほとけ} さとり^{おきて} 仏の^{はん} 掟に^{おきて} 反す、^{おきて} ひじりを^{おきて} さとり^{おきて} ひじりの^{おきて} 掟
 に^{はん} 反す、いましめを^{おきて} さとり^{はん} いましめの^{はん} 掟に^{ほう} 反す、みだれを^{ほう} さとり^{ほう} みだれの^{ほう} 法
 を^{おか} 犯す、ねじけた^{ほう} ことを^{おか} さとり^{あやま} ねじけた^か ことで^{おお} 法を^{おお} 犯す、^{おお} 過ちの^{おお} 数が^{おお} 多いの
 で、^{のが} ほどく^{せい} 逃れる^{かい} のは^{ひと} むづかしい、^{ひと} 政界の^{ひと} 人^{たち} 達は、^{おほ} おほやけの^{つと} つとめ^め には^よ よ
 い^{おこ} おさめると^{おこ} 行^し いが^こ でき、^し しか^こ し^こ 私^{ころ} の^{おも} 心^{おも} が^{おも} は^{おも} な^{おも} は^{おも} な^{おも} し^{おも} く^{おも} 思^{おも} い、^{おも} よ^{おも} こ^{おも} し^{おも} ま^{おも} に
 か^{ただ} たより^{ただ} かく^{こと} して^{おこ} 正^{おこ} しくない^{おこ} 事^{おこ} と^{おこ} 行^{おこ} う、^{おも} おもて^{おも} と^{おも} う^{おも} ら^{おも} は^{おも} 差^{おも} 異^{おも} が^{おも} あり、^{おも} 論^{おも} 議^{おも} の
 す^{おし} じ^{おし} み^{おし} ち^{おし} を^{おし} く^{おし} ず^{おし} れ^{おし} に^{おし} 教^{おし} え、^{おし} 諸^{おし} 々^{おし} の^{おし} 社^{おし} 会^{おし} に^{おし} メ^{おし} デ^{おし} ヤ^{おし} ー^{おし} も^{おし} ん^{おし} は^{おし} へ^{おし} る、^{おし} その^{おし} は^{おし} た^{おし} ら^{おし} き
 は、^{おほ} おほやけの^{つと} 勤^{つと} め^{つと} を^{つと} 自^じ 分^ぶ で^ぶ 用^{よう} ひ^{よう} る、^{ただ} そ^{ただ} して^{ただ} 正^し しくない^し 事^し 、^し 死^し な^し し^し め^し る^し 事^し や
 み^あ だ^あ ら^あ と^あ む^あ す^あ び、^あ 怪^あ しい^あ 言^こ 語^ご を^こ 使^{つか} ひ、^{おほ} おほ^{おほ} ぜ^{おほ} い^{おほ} の^{おほ} 人^{ひと} に^{おほ} か^{おほ} は^{おほ} ゆ^{おほ} が^{おほ} る^{おほ} を^{おほ} 手^て に^て 取^と っ
 て^{てん} も^{てん} て^{てん} あ^{てん} そ^{てん} ぶ、^{おほ} 天^{おほ} は^{おほ} 恥^{おほ} かい^{おほ} と^{おほ} 思^{おほ} ふ、^{おほ} 天^{おほ} は^{おほ} 卑^{おほ} しい^{おほ} と^{おほ} 思^{おほ} ふ、^{おほ} 並^{おほ} 々^{おほ} ま^{おほ} こと^{おほ} で^{おほ} 正^{おほ} しい^{おほ} 台
 湾^{わん} の^{わん} 子^{わん} 々^{わん} 孫^{わん} 々^{わん} は^{わん} 神^{わん} 様^{わん} の^{わん} 言^{わん} 語^{わん} を^{わん} 守^{わん} り^{わん} し^{わん} る^{わん} す、^{わん} 人^{わん} の^{わん} 行^{わん} う^{わん} べ^{わん} き^{わん} 道^{わん} と^{わん} 勇^{わん} 気^{わん} を^{わん} あ^{わん} ら^{わん} は^{わん} し
 て^{てき} 適^{てき} す^{てき} る、^{おほ} 大^{おほ} きな^{おほ} 願^{おほ} 望^{おほ} を^{おほ} 行^{おほ} い、^{おほ} か^{おほ} く^{おほ} れ^{おほ} た^{おほ} 影^{おほ} から^{おほ} 歩^{おほ} み^{おほ} 出^{おほ} て、^{おほ} 台^{おほ} 湾^{おほ} 精^{おほ} 神^{おほ} を^{おほ} 広^{おほ} 々^{おほ} と
 あ^{おほ} き^{おほ} ら^{おほ} か^{おほ} に^{おほ} あ^{おほ} ら^{おほ} わ^{おほ} れ、^{おほ} 神^{おほ} 様^{おほ} は^{おほ} あ^{おほ} な^{おほ} た^{おほ} と^{おほ} 同^{おほ} じ^{おほ} く^{おほ} な^{おほ} る。

だいじゅうしょう あとじょ
 第十 章 後 序

台湾^{たい} の^{たい} 英^{たい} 霊^{たい} は、^と 取^と り^と も^と な^と ほ^と さ^と ず、^{たい} 台^{たい} 湾^{たい} の^{たい} 地^{たい} 生^{たい} の^{たい} 大^{たい} 菩^{たい} 薩^{たい} 、^{かみ} これ^{かみ} も^{かみ} 神^{かみ} 様^{かみ} が^{かみ} 世^{かみ} の
 中^{なか} にお^{なか} くる^{なか} つ^{なか} か^{なか} い^{なか} である、^ち 血^ち を^ち 流^ち して^ち 民^ち 主^ち 人^ち 権^ち を^ち 進^ち ん^ち で^ち 耕^ち し^ち 台^ち 湾^ち の^ち た^ち め^ち に
 犠^ぎ 牲^ぎ した^ぎ 諸^ぎ 々^ぎ の^ぎ 人^ぎ である、^{たい} この^{たい} わ^{たい} け^{たい} で^{たい} 台^{たい} 湾^{たい} の^{たい} 子^{たい} 々^{たい} 孫^{たい} 々^{たい} は^{たい} この^{たい} 幸^{たい} い^{たい} に^{たい} 従^{たい} う、
 それ^{ふた} で^{ふた} 再^{ふた} び^{ふた} 皆^{ふた} と^{ふた} 同^{ふた} じ^{ふた} に^{ふた} 在^{ふた} る、^な そ^な で^な ゆ^な え^な に^な 並^な 々^な に^な 人^な は^な 台^な 湾^な を^な 認^な め^な る^な こと^な を^な は^な た
 ら^し く、^し この^し 書^し を^し た^し も^し ち^し お^し さ^し め、^{たい} ひ^{たい} と^{たい} す^{たい} じ^{たい} に^{たい} 台^{たい} 湾^{たい} の^{たい} 安^{たい} 危^{たい} と^{たい} 生^{たい} 死^{たい} を^{たい} 約^{たい} 束^{たい} す^{たい} る^{たい} 者^{たい} 、^し 自^し 己^し 然^し に^し 強^し い^し ひ^し と^し す^し じ^し に^し あ^し ら^し ん^し 限^し り^し の^し 力^し が^し あ^し ら^し は^し れ^し る、^た 確^た か^た に^た 守^た り^た と^た た^た す^た け^た が^た 得
 ら^{ぜん} える、^{つよ} 心^{つよ} に^{つよ} ま^{つよ} も^{つよ} る^{つよ} 事^{つよ} を^{つよ} ね^{つよ} が^{つよ} ぶ。

こうかいぶん
向廻文

この書を讀誦すれば功業がたもつ、法をほどすと徳に化せられて善に移
る、迷の途から従へ渡る、早くさとり早く迷ひをとく、台湾の国づくりは、
いきほひで必ず行い、子々孫々は民主と建国をたてまつて行う、人權と自
由は命があると続けられる、二二八精神は台湾と同じに続く。

さいご めいしんじゅもん さんかいとなへ
最後に明心呪文を三回誦ます

あん あん はん はん ざん
唵唵吽吽唵

とを らあ ばあ にい はん
哆囉叭呢咁